

Seijo Univ.

Curator Course NewsLetter

成城大学学芸員課程ニュースレター

Newsletter from Curator COURSE of Seijo University



MARCH 31, 2026

CONTENTS

§ 1- 巻頭言	「資格」から「今日的教養」へ ウェルビーイング・地域連携・DX の時代における学芸員課程の意義	成城大学文芸学部教授 小澤正人
§ 2- 学芸員名鑑第9回	「これまで偶然の巡り合わせで生きてきました。」 「好きなこと」を仕事に	泉屋博古館東京 館長 野地耕一郎 栃木県立美術館 研究員 清水友美
§ 3- 特別企画 特別寄稿	「学芸員出身の大学教員の独言」 「記しておきたいと思う事 二、三」	成城大学文芸学部教授 岩佐光晴 成城大学文芸学部教授 小島孝夫
§ 4- 編集後記		

Word search grid with a vertical word 'しゅくじゅ' circled in red. The grid contains various kanji characters for search.

vol. **10**

Curator Course Word Search

- 生涯学習概論
- 〔博物館〕展示論
- 〔博物館〕資料論
- 〔博物館〕概論
- 〔博物館資料保存論〕
- 〔博物館〕教育論
- 〔博物館〕経営論
- 〔博物館〕実習
- 祝10号
- 〔博物館〕情報・メディア論

学芸員課程カリキュラム

学芸員資格取得要件（文芸学部生のみ対象）

成城大学で学芸員資格を取得するためには、まず学芸員課程に登録し、各種ガイダンスに出席したうえで、①と②を満たす必要があります。

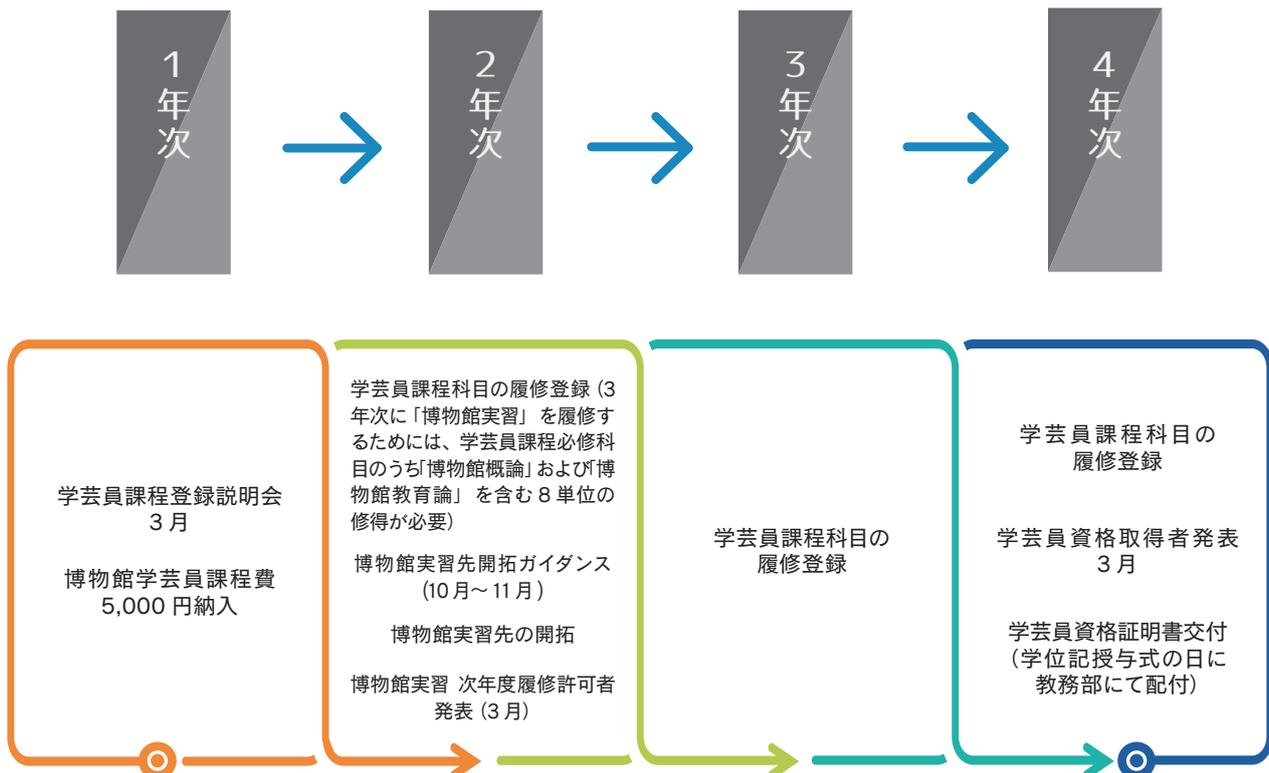
- ① 「必修科目」19単位、「選択科目」を2系列以上にわたって8単位以上修得
- ② 学部を卒業（学士の学位を取得）する

大学院生の場合は、①を満たした時点で資格が取得できます。

なお、「必修科目」のうち、博物館実習については、学内での講義のほか、博物館や美術館等で実習を行う必要があります。

※詳細は文芸学部「履修の手引」を参照してください。

・学芸員資格取得までの流れ



学芸員資格取得の最大の関門となるのが博物館実習です。博物館実習先については、各学生の希望に基づき、学内選考や各館園での選考の後、決定されます。事前に様々な館園を訪問し、特色や展示方法を学ぶとともに、履歴書の書き方や自己PR、志望動機など事前に準備をしておきましょう。

令和7年度 博物館実習先館園

茨城県近代美術館 上野の森美術館 大磯町郷土資料館 行田市郷土博物館 古代オリエント博物館 埼玉県立歴史と民俗の博物館 静岡市立登呂博物館 静岡市歴史博物館 シルク博物館 世田谷区立郷土資料館 調布市郷土博物館 東京国立博物館 東京都江戸東京博物館 東京富士美術館 遠山記念館 日本民藝館 府中市美術館 民音音楽博物館 横浜美術館

成城大学文芸学部教授

小澤 正人

学

芸員課程は、博物館法に基づく学芸員資格を取得するための専門的教育課程として、長年にわたり大学教育の中で重要な役割を果たしてきた。資料の収集・保管・調査・展示という実務に即した学びは、博

物館・美術館等の専門職を志す学生にとって不可欠であり、この点における学芸員課程の意義は今後も変わることはない。

一方で、私たちを取り巻く社会環境は大きく変化している。人々の生き方や価値観が多様化し、地域社会のあり方が問い直され、デジタル技術が知のあり方そのものを変えつつある現在、博物館や文化施設に期待される役割も拡張している。こうした状況下で、学芸員課程は単なる「資格取得のための課程」にとどまらず、変化の激しい社会をよりよく生きるための新しい「教養」を育む教育課程としての意味を強めている。

近年、博物館・美術館は単なる展示の場ではなく、人々のウェルビーイングを支える場としても注目されている。文化や歴史、芸術に触れる体験は、知的充足だけでなく、心の安定や他者とのつながりを生み出す。学芸員課程では、資料を通じて人間の営みを多角的に捉え、来館者一人ひとりに寄り添った伝え方を考える力を養う。こうした学びは、他者を理解し、社会との関係性を見つめ直す姿勢を育て、結果として個人と社会のウェルビーイング

に貢献する素地となる。

また、学芸員課程は地域連携と深く結びついた教育の機会でもある。博物館・美術館は地域に根ざした文化資源の拠点であり、地域の記憶や知を未来へと継承する役割を担っている。実習や調査を通じて学生が地域社会と関わる経験は、教室内の学びを超えた実践的な学修となる。地域の人々と対話し、課題を共有しながら文化を活かすプロセスを学ぶことは、地域共生社会の担い手を育てることにもつながっていく。

さらに、DX（デジタルトランスフォーメーション）の進展は、学芸員課程の学びの射程を大きく広げている。デジタルアーカイブ、オンライン展示、データベース化された資料の活用など、博物館・美術館の現場ではデジタル技術が不可欠となっている。学芸員課程で培われるのは、単なる技術操作能力ではなく、デジタルを通じて文化をどのように保存し、いかに社会に開くかを構想する力である。これは、情報の信頼性や公開のあり方を慎重に吟味する姿勢を含む、現代的教養そのものと言える。

このように、学芸員課程は、ウェル

ビーイング、地域連携、DXといった現代的課題と結びつきながら、専門性と公共性を併せ持つ学びを提供している。そこで培われる力は、博物館専門職に限らず、教育、行政、文化事業、民間企業など、さまざまな分野で活かされるだろう。

学芸員課程は今、資格取得という明確な目標を土台としながら、社会と人をつなぎ、文化を通じて未来を構想する「今日的教養」の場へと進化している。現在は文芸学部のみが履修可能であるが、将来的には全学部の学生が履修できる仕組みへと発展していくことが期待される。

もともと、履修者の間口を広げるためには、運用の実務面において検討すべき課題も存在する。とりわけ、履修者数の増加に伴い、外部の博物館・美術館に依存してきた博物館実習（館園実習）の体制については、持続可能な形を模索する必要があるだろう。今後、学芸員課程のさらなる充実を図るうえで、学園内に博物館実習が可能な「博物館相当施設」が整備されることは、極めて大きな意義を持つ。その実現に向けた環境整備が進むことを強く期待したい。

巻頭 言

「資格」から 「今日的教養」へ

ウェルビーイング・地域
連携・DXの時代における
学芸員課程の意義

これまで偶然の巡り合わせで 生きてきました。

野地耕一郎

泉屋博古館東京 館長

美術館の学芸員としてこれまで四十二年活動してきた。けっこう長いなと思う。長く続けられたのは、何より学芸員という仕事が「面白い」からに他ならない。実に幸せである。

十九世紀フランス絵画史を専攻する学生だった私が、どうした奇縁から近代日本画専門の山種美術館の学芸員に採用されたのが一九八三年春のこと。美術館には「生もの」と「乾きもの」の二種類がある。生ものは、もちろん現存の美術作家で、乾きものは美術作品資料である。また、現代美術は生ものので、古典美術は乾きもの、といえるかもしれない。山種美術館は、現存も物故も両方扱っていたから、必然的に「生乾き」研究に私は没頭せざるを得なかった。それらを肴にだらだら飲む（研究する）のが性に合ってもいた。

「生もの」の方では、山種コレクションの中心でもあった巨匠・奥村土牛（一八八九〜一九九〇）との邂逅が、生涯の宝ともいえる経験となった。まだ右も左も定かでない当時の私は不遜にも土牛画伯好物の三国屋の鰻重を手土産に杉並の画室を訪ね、九十翁の画伯とともに食しながら、画伯の来し方を聞き出すことが出来た。怖いもの知らずにも、画伯の天性の狂いともいえるようなデッサンについて質する私に、微笑しながら「若い頃に小林古径さんのところでセザンヌを模写し続けたせいだと思うよ」との画伯のお応え。おかげで、西洋画と日本画をつなげて考えられるようになった。そのことが私の中にとつと火を灯し続けてくれたのである。

「乾きもの」では、菊池容齋（一七八八〜一八七八）という幕末明治期に活躍した画家（絵師）を知ったのも、山種時代のこと。ほとんど忘れられた存在だったこの画家のことを教えてくれたのは、財団理事だった多湖輝さん（一九二六〜二〇一六）である。多湖さんは、教育心理学



【図一】 菊池容齋《自画自賛肖像(部分)》
1871年

者で、その著書『頭の体操』シリーズは累計で一二〇〇万部以上のベストセラーとなっているから、知る人も多いはず。私も少年時代に読んで頭の柔軟体操に勤しんだ。その多湖さんのご先祖が菊池容齋だったのである。ある日、多湖さんに誘われ、ご自宅で見せられたのが、容齋作《自画自賛肖像》という絵【図一】。洋画家の自画像は山ほどあるが、日本の伝統画流派の自画像はほぼ無いから、これには驚いた。

それから私の容齋探求の旅が始まった。容齋の重要な仕事の一つが、明治元年に細川家から明治天皇に献上された版本『前賢故実』十巻である【図二】。この本には、古代から南北朝まで皇室

に尽くした賢君忠臣七五一人の全身肖像と評伝が録されていて、その全てを容斎が綿密に調べ上げ描写している。刊行までに数十年をかけた労作だけに、校正に多数の人員が関わっているのだが、その一人に手塚良仙という蘭方医がいる。図像入り書籍を校正する医師の領分といえば、人体骨格の精度以外に考えられない。現在でいう美術解剖学的な見地からの校正であろう。多湖家には容斎による多数の墨書き素描が遺されていて、その中に人体骸骨を描写したものも多数あった。手塚良仙は西洋医学の見地から容斎にアドバイスしていた可能性が高いし、容斎自



【図二】 菊池容斎「前賢故実」より

身も先進知識をどん欲に採りいれる進取の精神に富んでいた。因みに、この手塚良仙は漫画の神様・手塚治虫のご先祖様である。自身医学部出身だった手塚治虫による自伝漫画『陽だまりの樹』にこの良仙が登場する。容斎の子孫もまた代々絵師と医師となるものが連なるから、多湖さんは科学者系の血統を次いでいたということになる。

そうして出来た『前賢故実』は、明治以降の日本絵画に多大な影響を及ぼしている。明治二十年代になると近代天皇制による国民国家建設において歴史画の需要が増えるが、その作画モチーフとして『前賢故実』から多く引用されたのである。また、東京美術学校以外の画塾では、生身のモデルをあまり雇えなかった時期に『前賢故実』をお手本に画学生に学ばせていた。先に紹介した土牛画伯も梶田半古塾に入門当初、まずは『前賢故実』の模写から入ったと語っている。

話はこれに止まらない。ことほど左様に容斎は、自身の画風にも西洋風を採り入れていて、その代表作ともいえるのが弘化四年（一八四七）制作の《桜

図》【図三】である。その立体的で重厚な描写は既に近代日本画を先取りしている。この絵は、容斎が上野寛永寺ゆかりの高僧が京に戻る記念として注文を受けたものだったが、お披露目の席で時の関白鷹司政通の目に留まり持ち帰って所持したという代物で、以来所在不明となっていた。

一九九九年に私は、移籍していた練馬区立美術館でこれまでの容斎研究の



【図三】 菊池容斎《桜図》 1847年 絹本着色・軸 86.0×175.2cm 泉屋博古館東京蔵

成果として『菊池容斎と明治の美術』展を企画した。かの《桜図》は依然所在不明のまま、展覧会は『前賢故実』とその近代における展開を主眼に開催して、はからずも斯界から高い評価を受けることができたのだが、代表作を探し出せなかったことが何より心残りだったのである。

ところがである。この絵が近年、ひよっこり私の目の前に現われた。それも現在在籍する泉屋博古館の蔵の中から……。泉屋博古館コレクションの基礎を造った住友家十五代吉左衛門友純（号は春翠）の祖父こそ、あの絵を持ち帰った関白鷹司政通だったのである。そんなわけで、《桜図》はいま私の手元にある。そして、数年後に菊池容斎展の決定版を用意する日々を私は楽しんでいく。

かような偶然的巡り合わせのもろもろが、学芸員を四十年以上も続けられている私の力となっている。だから、学芸員は辞められない。

「好きなこと」を仕事に

栃木県立美術館 研究員 清水 友美

私は、二〇二四年四月から栃木県立美術館に学芸員として勤務しています。当館に勤務する前は、日光市にある小杉放菴記念日光美術館で約七年間勤務していました。

そもそも、私が「学芸員」という職を知ったきっかけは、『13歳のハローワーク』（村上龍著、二〇〇三年、幻冬舎）をちょうど十三歳のときに読んでことでした。約五百種類の職業をジャンルごとに紹介する仕事の百科事典とも呼べる本でしたが、帯に記されたひとことが私の心を捉えました。

好きで好きでしようがないことを
職業として考えてみませんか？

幼

い頃から、家族とともに美術館や博物館、郷土資料館によく足を運んでいたためか、次第に学芸員に憧れる気持ちを抱くようになりました。家族の理解を得て、成城大学文学部芸術学科に進学。卒業論文と修士論文は、近代日本を代表する洋画家・黒田清輝の裸婦像をテーマに執筆しました。

成城大学は、学生と先生との距離が近く、きめ細かな研究指導を受けられることが魅力の一つと言えますが、学



外の経験も今の仕事に大きく活かされていると思います。ここで、大学院時代に積んだ二つの経験を紹介します。

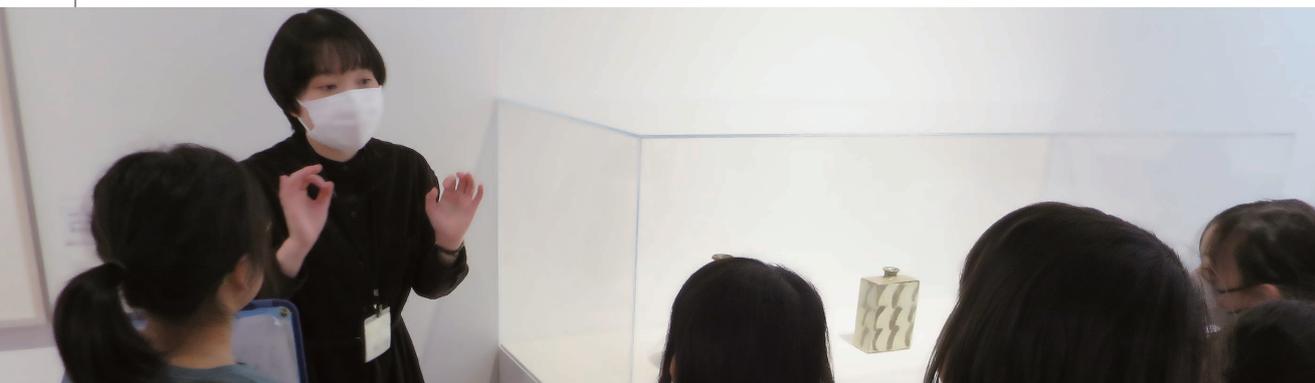
一つ目は、国立情報学研究所での『みづゑ』のOCR化と校正作業、そして東京文化財研究所での『黒田清輝日記』のホームページ公開に向けての校正作業です。これらのアルバイトを通して、近代日本美術史を学ぶ機会を得たほか、旧漢字の読解スキルを得るなど、研究の基礎を築く上で、非常に貴重な経験となりました。

二つ目は、博士課程後期二年で経験した東京国立近代美術館（東近美）のインターンシップです。当時学芸員に憧れる気持ちはあったものの、「どのような学芸員になりたいか」という明確なビジョンを持つことができず、大学院で日々を過ごしていました。それを打破するきっかけとなったのが、一年間にわたる東近美でのインターンシップでした。展示替作業や所蔵作品管理の補助の業務を通して、コレクション展ができるまでの過程を学ぶことができたのですが、何より感銘を受けたのは、所蔵作品の魅力を様々な角度から引き出す研究員、作品を展示する美術品専門の作業員、会場の設営を

する職人など、プロフェッショナルの力によって展覧会会場が形作られていることでした。そのような体験から、私も学芸員として現場に立ちたいというより強い思いを抱き、全国各地の採用試験を受け続け、インターン修了の時期が近づく頃、ついに小杉放菴記念日光美術館の学芸員の職を得ることができました。

東近美のインターンシップで得たさらなる大きな学びは、コレクション展こそ、その美術館の「素顔」であるという点です。企画展と比べると、コレクション展は見過ごされがちかもしれませんが、しかし、各館の収集方針のもとで集められた所蔵作品には、地域性などの個性が現われており、人と同じく、唯一無二のものなのです。また、展示作品を前後にどう並べるかによって、作品のもつ「表情」が大きく変化することも魅力の一つです。このコレクション展への考えは、現在も学芸員としての私の指針であり続けています。

さて、栃木県立美術館における私の担当業務は、所蔵作品の調査研究・管理と展覧会（企画展・コレクション展）の企画・運営、そして教育普及です。



その中でも、学芸課メンバー全員が普及班として、各イベントの企画・運営に携わる教育普及事業は、当館の特色といえるでしょう。作品の展示方法などをクイズ形式で紹介する「美術館ふしぎ発見!」、美術家から直接指導を受け、参加者が作品を制作する「大人の図工室」、さらには「ママ・パパ鑑賞応援デー」など、幅広い世代を対象とした普及イベントを年間を通して開催しています。それ以外にも、美術館に訪れる各種学校の児童・生徒たちへ向けた対話型鑑賞も随時受け入れを行っており、これもまた重要な普及事業の一つです。この対話型鑑賞は、学芸員がファシリテーター（進行役）となり、参加者たちと対話を重ねて、作品を鑑賞するものです。参加者が発したことばをすくい上げ、対話を繋げてゆくのが、学芸員の腕の見せ所ですが、そのためには、作品の歴史的背景、作者の生涯、素材や技法など、日々の調査研究を欠かすことはできません。対話を重ね、参加者の作品に対するまなざしがパッと変わった瞬間に、喜びを感じることが出来ます。

このように、実に多岐にわたる学芸員の業務ですが、すべてにおいて共通している点は、作品の魅力を「自分の

ことば」で伝えることにあると思います。そして、その原動力こそ作品に対する「好き」という気持ちに他なりません。昨今、地方自治体の予算削減などにより、美術館・博物館は厳しい状況に置かれていると耳にしたことがある方も多いと思いますが、この仕事に少しでも関心があれば、まずは学芸員課程を受講することをおすすめします。行動を起こさないことには何も始まりません。学芸員課程には、学芸員への道のみならず、皆さんの学びを豊かにする多くの出会いが待っていると思います。



令和7年度をもってご退任される小島先生、岩佐先生。本号をもって直接本誌に携わることは最後となる。本誌立ち上げよりご尽力いただいた、両先生には、それぞれ学芸員、博物館、博物館学芸員課程そしてニューズレターについて特別にご寄稿いただいた。



私は本学に着任する前の二十四年間、博物館の学芸員であった。本学に着任する前日の三月三十一日に博物館を退職する辞令を受けてからも、大規模な展覧会の主担当であったこともあり、残務整理に追われた。夕方になって、電話した相手先からも「まだ仕事をしているのですか。」とあきれられるほどであった。身の回りの整理も含めて一通り仕事を終えたのは夜の十時過ぎで、博物館の門を出た時に、長年お世話になったことへの感謝の気持ちを込めて、深々と頭を下げて立ち去ったことを鮮明に覚えている。その翌日の四月一日の午前中に本学で辞令を受け、私は大学教員になった。

数日後、フレッシユマンキャンプに向かうバスに乗りながら、美専車に乗っている錯覚に襲われた。美専車とは美術品輸送専用車両のことで、展覧会等で作品を借用する際に、振動などを軽減して、作品にできるだけ衝撃を与えないように設計された美術品専用の輸送用トラックである。美専車の座席は普通の車よりも高い位置にある。その座席の高さはちょうど観

光バスの座席の高さに似ている。それによる錯覚である。この感覚は、今でも時折襲われるものであり、自分の身体にはいかに学芸員の血が濃厚に流れているかを実感させられる。

博物館在職時に、作品の借用のために美専車に乗って全国を走り回り、東名、名神の高速道路は何度往復したかわからないほどである。いつの間にか、その車窓の景色をほとんど覚えてしまった。専門が仏教彫刻史であるため、輸送の対象は仏像である。博物館在職中、国宝、重要文化財を含めて数えきれないほどの仏像の輸送に関わった。

大学教員になってからも、全国で開催される仏像をテーマにした展覧会ではできるだけ観覧するようにしてきた。観覧するたびに思うことは、仏像を梱包して輸送することの労力と、輸送用に作製された箱の量である。仏像には付属物が多く、本体のみならず、台座、光背、持物などはそれぞれ別梱包になり、最低でも荷物は四個口となる。絵画の場合は、屏風は折り畳むことができ、軸物や巻物は巻くこと



学芸員出身 大学教員の独言

岩佐光晴

成城大学文学部教授

ができるため、梱包はコンパクトにすることができ。そうしたことから、美術品を専門に取り扱う業者の間では、「絵画は小さく梱包して大きく展示し、彫刻は大きく梱包して小さく展示する。」などと言われていたものである。大規模の仏像の展覧会の場合、輸送用に作製される箱の量は尋常ではなく、会期中その空き箱をどこに収納しているのだろうかなどと余計な心配をしてしまうほどである。展示を見ながら、仏像の角度やライティング、展示の高さなどが気になってしまい、自分の中の学芸員の血が騒ぐこともしばしばある。

大学教員になって十六年が経ち、退職の時を迎えた今でも、学芸員気質が全く抜けない自分を実感している。私の中では学芸員としての自分と大学教員としての自分が全く分ちがたく結びついている。そして、美術史研究者としても、大学教員としての自分と学芸員としての自分はイコールの関係にあると認識している。しかし、世間一般から見ると、必ずしもそうとは言えないようである。

大学教員になってから、名刺交

換の度に感じるのは、研究者としての観点からすると、大学教員の方が、学芸員よりもずっと通りがよいということである。少なくとも美術史の分野では、大学教員も学芸員も対等な立場であるはずであるが、世間的には研究者としての学芸員の認知度は大学教員よりも低いと言わざるを得ない。毎年、各地の博物館、美術館で開催される特別展は、学芸員の長年の研究成果を踏まえて企画されたものが多いといえる。いわば、特別展は学芸員の研究発表の場であり、同時に作成される図録は研究成果の結晶ともいえるものである。しかし、特別展もその図録も研究業績としては、なかなか正当な評価がされていないのが実情である。そうした観点からすると、日本および東洋の美術についての優れた研究に贈られる國華賞（朝日新聞社・國華社主催）に第二十回の平成二十年（二〇〇八）から展覧会図録賞が設けられたことは画期的な意味をもつといえよう。

研究者としての学芸員の社会的な位置づけについては、もっと積極的に議論されてよい時期に来ているように思われる。

記しておきたいと思う事二、三



小島孝夫
成城大学文芸学部教授

一九九六年四月に着任して三〇年が過ぎた。所属は文芸学部文化史学科であったが、着任時から「博物館実習（民俗学）」を担当し学芸員課程委員会に関わることになった。定年退職にあたり、学芸員課程の成り立ちや現状について、二、三記しておきたい。

一・学芸員課程のこと

一九七三年四月に成城大学大学院文学研究科に日本常民文化専攻博士課程が設けられたのと同時に、大学研究施設として民俗学研究所が設立された。併せて、研究所を実習施設として位置付けることで本学の学芸員課程が認可された。

私が着任したのはその二三年後ということになる。その年に採用された教員は四名で、武蔵野美術大学から転出された佐野みどり先生も一緒にだった。日本美術史専攻の佐野先生と私はともに学芸員課程の「博物館実習」を担当することになり、学芸員課程受講生に対して有意義な実習機会を準備することに腐心していくことになった。その結果、民俗学・美術・考古学の三分野から二つを選択する従前の実習方式に、現地調査を加えた実践形式の実習を試みることになった。民俗学の実習では、博物館や博物館建設を準備している自

治体の資料整理作業などに参画していくことになった。教室で民俗資料の調査カード作成や実測図の作成に関する実技指導を行い、夏季休暇期間中に一週間程度の現地実習を実施した。実習先は単年度ごとに選択されたが、二〇〇〇年度から二〇〇二年度には山梨県南都留郡鳴沢村での民家実測を試みた。受講生に加えて、全国で重要有形民俗文化財指定のための実測図を作成していた武蔵野美術大学卒業生に応援と指導を依頼し、毎年一軒の民家の実測図作成を行った。この実習が契機となり、複数年度に亘る計画的な実習が恒常化されるようになった。この実習方式がもたらした成果の一つが、二〇〇九年に開館した御蔵島観光資料館の開設である。鳴沢村での実習終了後に開始した東京都御蔵島村での博物館実習で実施した民俗資料整理作業が契機となり、村内で新たな資料館開設計画が具体化された。教育委員会からの要請により、その準備作業に実習参加者、本学出身学芸員が参画し、資料館開設のための資料整備事業が実施された。これらの現地実習にティーチングアシスタントとして参加した大学院生たちが次々と公立博物館の民俗担当学芸員として採用されていくことになった。

また、この実習方式の特徴は異なる分野の資料の特性やそれらの資料を対象にした調査研究方法を理解していくことができることで、視野の広い適応力のある受講生を育成することができるといった点だった。そのため、二〇〇四年に文化庁の「博物館実習ガイドライン」が公表された後も、ワーキンググループでの検討を続けながら、この方式の実習を二〇一三年まで継続することになった。その間も成城大学独自の実習経験者が学芸員として採用されていくことになった。

二・「ニュースレター」のこと

新たに「博物館実習」を担当することになった私たちのもう一つの課題は、現場で学芸員として勤務している方たちとの連携をどのように図るかということであった。教員と本学出身学芸員とは知己であったが、学芸員課程としての把握と共有は充分ではなかった。当時の学芸員課程担当職員の方々による名簿作成が行われ、学芸員課程委員会でのように連携を図るかが検討されていくことになった。学芸員の方々との協議も行われ、最初の試みとして学芸員課程主催の茶話会が開催された。博物館・美術館に勤務している方たちに幹事をお願いして、博物館・美術館勤務の学芸員の方たちに交互に話

題提供をしていただくことで、学芸員課程と現役学芸員の方たちとの情報交換の機会を定型化しようと考えた。この試みは二年ほど続いたが、ゲストスピーカーの専門領域の学芸員が集まりがちで恒常的な組織作りには至らなかった。毎回のゲストスピーカーを人選していただく幹事の方々の負担が大きかったうえに、幹事の世代交代も難しかった。

次の試みが現在の「ニュースレター」の発行である。学芸員課程に任期付きの特任教授を迎えることになり、恒常的な現役学芸員との連携の機会が模索されていくことになった。学芸員課程の教員、職員と学芸員課程非常勤講師を務めていた卒業生の篠原聰さんとで協議が行われ、卒業生の吉井大門さんに具体的な編集作業をお願いすること、二〇一九年にパイロット版が刊行された。茶話会での経験から、各号の編集は柔軟に行うことにし、当初計画した年二回の発行も年一回に変更して現在に至っている。現在まで一〇号が刊行されてきたが、学芸員課程と現役学芸員との連携を主目的にせず、現役学芸員の方たちの活動を紹介することを念頭に置いた編集方針が功を奏したようである。こう

した編集方針の蓄積が結果として学芸員課程と現役学芸員との連携を適えてきた。二〇二三年に成城大学で全国大学博物館学講座協議会東日本部会大会が開催されるのを機に、パイロット版から八号までの合冊版を作成し大会で配布したところ、学芸員課程と現役学芸員との連携を図る試みが具現化していることが多くの関係者から高く評価された。毎回の編集会議は試行錯誤の連続であったし、ボランティア編集作業を担当していただいて吉井さんには大変なご負担をおかけしながら現在に至っているが、「ニュースレター」の刊行は是非とも継続させていただきたいと念じている。

三．大学博物館のこと

旧中学校校舎が九号館として整備され、三階に博物館実習室・資料室が開設された。着任時に佐野先生と相談を始めて一五年後のことである。その間、二号館の教室に博物館実習室という表示が付されたこともあったが、専用の実習室が開設されたのはこれが最初である。学芸員課程で検討を始めても実現まではこれだけの時間がかかっている。本学の学芸員課程は文芸学部開設されているため、学芸員課程委員会を議論して全学の理解や応援を得るこ

とが難しい。学習院大学の学芸員課程のような全学的な展開は現状では想定されていない。文化財行政の現場では、学習院大学法学部出身の学芸員が採用されており、文化財保護の実務に際して法令面での助力を得ることがある。将来、全学部の学生が学芸員課程を受講することができるようになるためには、博物館実習を学内で実施できる大学博物館が必要となる。

ところが、成城大学をはじめとする第二次世界大戦後に開設された新制大学の多くには博物館が設置されていない。戦後の大学令では大学設置要件は図書館だけになり、戦前の要件に含まれていた博物館は除外されたためである。戦後の復興期に大学設置を急ぐため、開設まで準備期間が必要な博物館は除かれたのである。大学に研究資料を有する大学は順次博物館建設をすすめていったが、本学は現在までそうした検討はすすんでいない。私の在任中には、中学・高校校舎の新築にともない旧ミュージック・ホールの二次利用として博物館建設が考え始められたが、いつのまにか学園の歴史記念館になった。現在計画が進行中の十号館の建設についても当初は研究棟としての構想が検討されたことがあり学内の研究施設が統合されることが期待されたが、教室を主体とした計

画になった。一方、現在も大学博物館の必要性が話題にのぼることがあるが、語られる内容は展示施設としての博物館の姿である。博物館実習が可能となる登録博物館としての要件である収蔵庫や専任学芸員の必要性について言及されることはない。こうした要件を念頭に置いた事業計画が作成されることがなければ、本学での大学博物館建設は遠い夢であろう。

次年度から、二三年ぶりに複数の専任教員が「博物館実習」を担当することになるので、大学博物館の必要性が検討されることになるのではないかと期待している。また、大学博物館建設にむけて、学芸員課程委員会とコンセンサスを作っていくためには、非常勤講師に多くを担っていただいている学芸員課程に関する教員間の情報交換や共有が一層必要となる。具体的な試みとして博物館実習室に隣接した廊下を教室と一体化して、博物館展示図録の閲覧や学芸員課程に関わる教員の授業内容に関するパネル展示などができる空間を作ることを検討したことがある。実現に向けた具体的な取り組みは始まっているが、学芸員課程主体で展開できる試みを蓄積させていくことで、大学博物館建設の必要性を学内で周知していくことが必要である。

学芸員就職先マップ

Curator employment map

Hokkaido

北海道立帯広美術館、北海道立近代美術館、北海道立函館美術館

Kinki region

佐川美術館、滋賀県立美術館、滋賀県立琵琶湖博物館、アサヒビル大山崎山荘美術館、京都国立近代美術館、泉屋博古館、文化庁、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪市立美術館、能楽資料館

Tohoku region

青森県立郷土館、棟方志功記念館、八戸市美術館、宮城県美術館、くりでんミュージアム、秋田県立博物館、木の博物館吉成銘木店、郡山市立美術館、みちのく民俗文化研究所

Kyushu & Okinawa region

出光美術館門司、熊本県庁教育庁教育総務局文化課、熊本市現代美術館、熊本市立熊本博物館、八代市立博物館、中富記念くすり博物館、沖縄県教育委員会、那覇市歴史博物館

Chugoku region

荻野美術館、倉敷市教育委員会、海の見える杜美術館、広島市現代美術館、ふくやま美術館、萩美術館

Kanto region

茨城県近代美術館、小杉放菴記念日光美術館、栃木県立博物館、栃木県立美術館、群馬県立自然史博物館、群馬県立館林美術館、群馬県立歴史博物館、高崎市美術館、朝霞市博物館、うらわ美術館、川口市教育委員会、川越市立博物館、埼玉県教育局、埼玉県立近代美術館、埼玉県立歴史と民俗の博物館、宮代町郷土資料館、我孫子市教育委員会、国立歴史民俗博物館、千葉県教育委員会、千葉県立中央博物館、千葉県立美術館、千葉県立房総のむら、船橋市教育委員会、船橋市郷土資料館、八千代市教育委員会、八千代市立郷土博物館、出光美術館、大倉集古館、太田記念美術館、小川美術館、葛飾区立郷土と天文の博物館、国文学研究資料館、国立西洋美術館、汐留ミュージアム、渋谷区立松濤美術館、杉並区立郷土博物館、静嘉堂文庫美術館、世田谷区立郷土資料館、世田谷区立次大夫堀公園民家園、泉屋博古館分館、タイムドーム明石（中央区立郷土天文館）、豊島区立郷土資料館、大東急記念文庫、たばこと塩の博物館、東京国立近代美術館、東京国立博物館、東京ステーションギャラリー、東京都江戸東京博物館、東京都写真美術館、東京都庭園美術館、東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館、日本書道美術館、ニューオータニ美術館、根津美術館、練馬区立美術館、八王子市郷土資料館、府中市郷土の森博物館、府中市美術館、ブリヂストン美術館、松岡美術館、三井記念美術館、目黒区美術館、山種美術館、厚木市郷土資料館、大磯町郷土資料館、神奈川県立歴史博物館、鎌倉国宝館、鎌倉市鶴木清方記念美術館、川崎市市民ミュージアム、川崎市立日本民家園、そごう美術館、松前記念館、玉川文化財研究所、平塚市博物館、横浜美術館

Chubu region

福井県立若狭歴史博物館、清春白樺美術館、山梨県立博物館、池田満寿夫美術館、諏訪市美術館、長野県信濃美術館、長野市立博物館、岐阜県現代陶芸美術館、岐阜県美術館、上原美術館、MOA美術館、かんなみ仏の里美術館、静岡県立美術館、ベルナルド・ビュフェ美術館、愛知県美術館、豊田市美術館

Shikoku region

愛媛県美術館、高島華宵大正ロマン館、香川県教育委員会、香川県立ミュージアム

★ 47 都道府県中 32 都道府県に就職 (68.0%)

★ 面積カバレッジ 71.1%

※ 名称は卒業生の就職当時のものです。

【編集後記】

本号で「成城大学学芸員課程ニュースレター」10号、2017年度に発行したパイロット版を含めて通巻11号となる。そして年約1号のペースで成城大学出身のOB・OG、ときには博物館のタイムリーな話題を紹介してきた。また、2023年度には、成城大学学芸学部創設70周年および学芸員課程創設50周年を記念した、シンポジウムも開催することができた。他学の類似媒体と比べると、より自由で忌憚ない言葉を各号でご執筆いただいた方々には語っていただけたのだらうと、10号を節目に振り返ってみると感じる。成城大学の自由な校風を体現する先生・教務部そしてOB・OGの方々のおかげと思う。

この約10年の間博物館の取り巻く状況は大きく変化している。2018年、文部科学省所管であった博物館関連の行政事務が文化庁へ移管され、地方自治体の博物館の所管が従来の教育委員会から首長部局へと変更できるよう法制度が改められた。より柔軟な博物館運営が可能になったとは言われるものの、博物館は元来文教施設であり教育に資するという本来の目的から遠ざけられ、加えて前年の文化庁移管とその前提となる芸術文化基本法など、文化・観光・地域振興の連携が行政上強化するための仕組みが作られたように感じざるを得ない。

2022年には、約70年ぶりの大規模な博物館法の改正によってデジタルアーカイブの文言が明確化された。そして、昨年11月に出された「第3回博物館の望ましい基準WG」の提言に民俗資料廃棄の文言。それもさることながら、より一層、マネジメントと収蔵資料の直接間接の履歴を求められるような内容となっていた印象もあった。賛否両論あるだろうがハード・ソフトともに博物館の底力を発揮していかないと、数年後には運営すら厳しくなる館がではじめるのではないかと危惧を感じる。(Y)

成城大学学芸員課程ニュースレター vol. 10

Seijo University Curator Course NewsLetter

発行：成城大学学芸員課程委員会 157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

TEL 03-3482-9045 mail: gakugei_nl_s@seijo.jp

編集担当 吉井大門 篠原聡 2026年3月31日発行